

門八
號3131
卷3

藏島
書

北越雪譜初編卷之下

目録

- 渤海川まきはりかわさかべつさかべつ順上下じゆじやくじやく
鮭の字考さけのじこう
鮭を捕さけをつかる手切並さけをつかるてきあわせ
漁夫の溺死ぎふのなれし
鮭漁の類術さけぎょのるいじゆ
人家の垂冰じじゅのたるひ
滝の冰柱たきのひょうちゆう
寒行の感德かんぎょうのかんとく
開山村の毛塚かいざむらのかげづか
泊り山の大锚とまりさんのおあわい
千曲川せんくわいの縦瀧さかずき
鮭の洲走りさけのしまはし
箕掛岩の冰柱みのりいわのひょうちゆう
雪中の寒行せつゆうのさんぎょう
雪中の幽靈せつゆうのゆうれい
雪中鹿を追せつゆうしかをお
山言語さんごんご

童の雪遊び

同二言 卷二

雪ふ座頭を降る

文洋堂作

通計二十三條

越後奇跡錄五卷

鈴木牧之編撰

近刻 京山人百樹刪定

此書も越後七不思議の細説并小圖名所回跡の変跡并圖
國中溫泉の圖并主沿山川勝景の圖説 近古人物名譽傳
挿の餘種の奇談其他を踏ま其事試見るがごくふ
記一ノ假字文の書あり
干此紙葉の餘地在り室へう坐て筆を以て右の書名
を標して大方の譜君不報ト刻ニ生んずる好評を祈る

書肆 文漢堂 謹識

京水西鶴画圖

北越雪譜初編卷之下



○渤海川さかべつとう

越後塙澤

鈴木牧之 編撰

江戸

京山人百樹

刪定

我が國の俚言小蝶をべつとうと渤海川のやまとゆそへまづべつとうとの蝶ハ譜
の虫の羽化する所へ大うるを蝶といひ小うるを蟻といひ本艸其種類ふるをど
草花も蝶小化する事本草ふるアリをテア蝶の和訓をかきひらことひハ新棋字
鏡ゆもアリと云ふべきと云ふ名美ハ未考モキテ前より渤海川ゆて春の
彼岸の頃幾百万の白蝶水面より二三尺をもよまく羽もをまのひをり群
が高きハ丈あたり両岸を限りとて川下より川上方へ飛行その形状花のよ
きとそんばかりに幾里ともうれ流みて霞をひまつるごとく朝より夕まで悉く
川上へつきるがそのまゝをあくも川水もなまざやこまそ日も暮らんとまづ

りとまく水面上をちりりと流みて、そのまゝ白布をうづびごとく其蝶の形
燈籠やどせて白蝶。我が國の大小の川々幾流もあるうち小此沿海川のまぐりて
毎年ふゞらぞ此事あるも奇とぞ。あつたか天明の洪水以来此事絶て。
○本草を採る小石蟹一名を沙蟹といひその山川の石上に附く蘭をうす春夏兩
化して小蟹となり水上不飛がとく件のまづさうハ浩海川の石蟹うすア其
種を供水水流にて冬にてゆゑえとえするより他國ゆも石蟹を生ざる川ある此蝶
あるもあらざり余此蝶を不至りゆゑ近隣の差婦若きころ沿海川の邊りより
嫁せ一人ありゆゑ事も問ひふそその老婦の語りイ一まくをこふ記せり。

○ 鮭の字の考

新撰字鏡とく字書ハ本朝の僧昌住といひ人今より九百四十年あまり
より後の学者の机上に置か實小春海大人の賜たりけり右の字鏡ありて
后二十余年を歷て源の順朝臣の作りする文字の吟味をあら書くむじより世の
元和の年間那波道因先生創て板本とせまきあり後の板書きと和名抄あり
后五百年前をへて文安年中下学集とく字書わりきことも元和三年
創て板本とく字書ハ下学集より五十三年の后明應五年林宗二坂の町人節用
集を作り文龜のとくの活字本ありとくいふは引節用集の權輿と其后
百八十年を歷て元和十一年小摸寫武駒谷山人が作りする江戸書言字考
一名合類節用集とく板本あり宗ニゲ節用集を大成する物をいふは引
之平地字類抄のとく下引本朝の字書のとく大体ハ件のとくまとば今俗用を
節用集ハ新撰字鏡和名抄を先祖の父母として后のハ皆其子孫とは鮭の字
の事を言ひとく童蒙の為小先りとけり ○ 新撰字鏡奥の部小鮭佐久

トモアリ和名抄文中本字ハ鯉俗小鯉の字を用テ非トリテシモハ鯉の字
を用ヒモ古一同書小雀禹錫^{アキタケイ}食經を引ク「鯉其子每^{アヒ}小似^{アヒ}赤く光り
春生^{スル}て年^{スル}内^{スル}死^{スル}故^{スル}小^{スル}年^{スル}魚^{スル}と名^{スル}」とテテモリ新撰字鏡小鯉の
字を出^{スル}ハ鯉と鯉と字の相似^{スル}を以^テ傳字の誤りを傳^ヘトモアリ
モ鯉ハ河豚の事^{スル}を下学集^{スル}も鯉干鯉と並^ゲ出せり宗ニ^ク文龜本の
筋用集^{スル}も塙引干鯉とタゞべりモ鯉と鯉と傳字のあすまアヤ
駒谷山人^{シヨウガトクナ}書言字考文中○鯉○石桂奥○水豚○鯉と出^{スル}て注^{スル}和名抄
を引^ク本字ハ鯉トモアリ太典和尚の學語編^{スル}鯉の字を出^{スル}トモ^ト鯉^ト
モアリト訓^{スル}唐の字書^{スル}鯉^ト大口細鱗^トアリ^ト鯉^トあるせらうん字彙
由^ハ鯉の本字ゆ^ハ奥^{アサヒ}と^ハ字^トと^ハ按^{スル}鯉の鮮鱗^ハことを
ラ^ハ小^{アサヒ}奥^{アサヒ}きの^ハ魚^{アサヒ}や^ハ小^{アサヒ}鯉^ハ鯉船^の一名^トモリ^ハ鯉^ハいふ^ト達^ス
シ^トモ^トか^ムと^ハ鯉^の字^トを知^リて俗用^{スル}鯉^の字^ト用^{スル}一件^トの如^ク

鯉の字も古く用ひよ^カいや^カの和文^カ文章^カも鯉の字を用^{スル}ト鯉の
字ハ昔^{アサヒ}通ド難^ハト^ハ姑^{アサヒ}鯉^{アサヒ}从^ハ

○ 鯉の食用

腥^ハ味^{アサヒ}喰^ハ○ 奥^{アサヒ}軒^ト○ 鰯^ト○ 鯉^ト○ 烹^{スル}○ 火^{アサヒ}そ^ハ料理^ハよりて猶
アリ^ト塙^{アサヒ}小^{アサヒ}を^ハ塙引^{スル}干^{アサヒ}鯉^トりひ^トも^ト事^{アサヒ}事^{アサヒ}不^{アサヒ}引^{スル}書^{アサヒ}小^{アサヒ}
え^{スル}事^{アサヒ}延喜式^{アサヒ}小^{アサヒ}を^ハ内^{アサヒ}子^{アサヒ}鯉^ハ今^{アサヒ}子^{アサヒ}籠^{アサヒ}鯉^の事^{アサヒ}アリ^ト
又^ト同^{アサヒ}書^{アサヒ}小^{アサヒ}脊^{アサヒ}腸^{アサヒ}を^ハ三^{アサヒ}口^{アサヒ}ト訓^{スル}丹後信濃越中^{アサヒ}越後^{アサヒ}貢^{アサヒ}とも夏^{アサヒ}
え^{スル}事^{アサヒ}古代^{アサヒ}鯉^ハ供^{スル}御^{アサヒ}小^{アサヒ}奉^{スル}り^{アサヒ}う^{アサヒ}都^{アサヒ}遠^{アサヒ}き^{アサヒ}う^{アサヒ}だ^{アサヒ}と^ハ
塙引^{スル}頭^{アサヒ}骨^{アサヒ}の澄^{アサヒ}微^{アサヒ}徹^{アサヒ}と^ハう^{アサヒ}水^{アサヒ}頭^{アサヒ}と^ハ鰯^{アサヒ}小^{アサヒ}雀^{アサヒ}子^{アサヒ}を^ハ鰯^{アサヒ}と^ハ事^{アサヒ}を^ハ
躉^{アサヒ}小^{アサヒ}も美味^{アサヒ}子^{アサヒ}ある^{アサヒ}を^ハ塙引^{スル}小^{アサヒ}子^{アサヒ}を^ハ子^{アサヒ}籠^{アサヒ}と^ハ古^{アサヒ}の^{アサヒ}モアリト
レ^{アサヒ}も是^{アサヒ}うん^{アサヒ}本草^{アサヒ}小^{アサヒ}鯉^{アサヒ}味^{アサヒ}甘^{アサヒ}微^{アサヒ}溫^{アサヒ}毒^{アサヒ}主^{アサヒ}治^{アサヒ}中^{アサヒ}を^ハ溫^{アサヒ}
氣^{アサヒ}壯^{アサヒ}小^{アサヒ}多^{アサヒ}食^{スル}癪^{アサヒ}發^{スル}モ^トアリ^ト我國^{アサヒ}塙引^{スル}小^{アサヒ}子^{アサヒ}を^ハ大^{アサヒ}晦^{アサヒ}日^{アサヒ}の

節ふ用ひざる家々又病人ふも食を他国にて腫物ふりむかてまづふうきどるやふやあらん

○ 鮭を出を所

鮭ハ今五畿内西國ゆ出を所を聞ぞ東北の大河の海ふ通ぢるふれ鮭あり
松前蝦夷地最多タ一塙引とて諸國(通商)ハ此地小限る次より我^々越後
ふ多^テ又信濃越中出羽陸奥^{ヒキ}常陸ふもありとまづの國の鮭
その所の食ふあつる不足の通商あるふくよず江戸ハ利根川ふありと
りども稀^{カミ}うるやゑ初鮭ハ初鰐の價小比をとぞ我国より毎年七月二十七日
所くふあず諏訪の祭りの次の日より鮭の漁をすゞら十二月寒のあけ^スを漁
の終りとぞ古志の長岡奥沼の川口よりゆく漁^スる一番の初鮭を漁
師長岡^{シナガウ}へそすとく例とて鮭一頭^ス一頭を一尺朱七俵の價を賜ふ^{タマセ}五
定^スあり^{タマセ}俵の金下る^{タマセ}鮭の大きさ^ス三尺四五寸^ス小さるも二尺四五寸^ス小さるもあ

男魚女魚の名ありちう^ハ子あるゆゑをうより^ハ價貴^ス一五番まで奉りて
后を賣る初鮭の貴^スア^ハてあくべ^スと^スを賣^スる江戸の初鰐奥
小をきく^スかく^スぞ初鮭ハ光り銀のごとくふして微青^スアモリ肉の色紅をぬ
り^スる^ス如^ク仲冬の頃^スいとま^ス身ふ班の鋗^スで肉も紅^ス薄^ス味もす劣
きり此國あく川口長岡のあく^スを流^ス川^スて捕り^スるを上品^スと味ひ他
ふ比^スを^ス十倍^ス僅不^ス其地を去^スバ味ひ美^スアモビ^スその味ひ美^スアモ^スの北海
より長江を下りて困苦^スするの度不^スあくまづ^スやゑうん^ス奥急浪^ス不困苦^ス味
ひえう^スぞ甘美^スの北海の奥の味ひ厚^スと南海の奥の味ひ淡^スの差^スあ
ゲ^ス

○ 鮭の始終

我が國の鮭ハ初秋より北海を出^ス千曲川と阿加川の兩大河^ス下るこ^ト
其子を産^スんとて女奥不男奥隨ての^スが^ス下る事^スか^ト五十余里河^ス在^ア



文淵堂藏

五



文淵堂藏

雪詩卷之二

涉海川奇蝶之圖

事よりそ五う月あまうくその間ふ八九十人ふ捕らとくとざくへ海へ飯る故ふ大
小あり子を産つり所ハかまふ心ふわつて一定あらぞとども千曲と奥野の両
河の合むる川口とひづり沙小石のまづらやゑことよりをものまが産所とし流
きの絶急うね清き流水の所小産こうまんとて鯉の捨く群るを漁師のみ
とび小掘ふつゝぎまふつゝともいふ沙をわらふあぐのこもをあせめのをみ
尾をりて水中の沙を掘る所廣き一丈あまり深さ七八寸長き一丈あまり數日
おしてこまを作つくりをひまび女奥とのうへ輪を一粒づ産むうむをなす
男魚己ヶ白鰐を彈着直ふ女奥男奥掘のけする沙石を左右より尾輪ふく
もくひうけて輪を埋む一粒も流さず事をせどさて此一掘小産をひまび又をまふ
並み掘りて、産うみてやり幾條もあぐりて終ふハ九尺四方の沙中（行義
よく腹の子をのこむを産むる或ハ所を替ても産とぞ沙小石の交りする
所小あらざまバ産をと漁師がりうその所為人の智ふをさへかとくを

産終るまでの困苦のとあ小尾輪を捲ひ身瘦勞きまふあらひまくとて
深淵あり所ふりてまぐらふ沈三層て勞を養ひりとあごとく肥太りて再び流
ふ你る掘ふつきる時ハ漁師もとをとよとびあく補ふりのあまじも強て
其ぬすと女奥まとうざまに男奥ハ其所をさうぞ鯉の何ふ你ふ子を産んと
てそその女奥小男奥隨てのびふ子の為不女奥を助ふきんことも又人の
心ふをとよとびきを寄るすハ河の廣き場所をき輪を産むる所供水を
ゆそ瀬うりて河原とおりしが戦をもつても産う子廢をやうび瀬とひまび
その子生化て鯉とす一年我が住む所の在あく奥野川のひとすふ住む人
井を掘ふ小輪の腥氣をやりひそをとすありと友人がかうに輪の生化す
を漁師のことぶふをやけとすまけともりり早化身化輪水ふある事十四
五日ふとて奥をう形ち糸の如くまけニ寸腹裂て腸をもとを多ふ佐久の名
ありとの傳ふ春ふいまとば長じて三寸あまり小うるて色をばうるを拂ひぬ事

とを此子鯨雪消の水ふ隨ひて海ふ入る海ふ入りそのち裂る腹合へて腸をみ
そと渙又びり前ふもりす如く鯨の渙ハ寒中を限りとも寒あけて捕まば
崇をうそとりひつて我ガ若り一時水村の一農夫寒あけて后櫛のとてひづ
鯨を奪ひてを喰ひて熟ふうを三日かゝて死する事ありさまでたりあると
いふ口碑の説も誣べらるど又多下産まきてうそをうそとまでその家断絶をとい
ひほて鯨の大さへ三尺四五寸ふあまるもあり之ハ年々網を脱まく長ド
きん我ガ若年のころハ鯨あまととてゐやゑその價もしやくレバ近年ハ
捕うる事少きあゑ價もひづくレバ倍せり年々工を新ふして漁もるゆゑ
捕減一すきん女奥の大さへ輪一升もあり小さへ三四合ふをまを江戸ふ
多くてあづみ塩引と喝をまへ鯨鯨と越後の鯨とハ品別種うき物うりと
或物産家のりり河ふ生まく海ふ成長まどむむかしより海ゆく網ふ入
る事ナリ其始終をかり小鯨ハ鱗族の奇奥といふ也

牧え常ふありてく寒氣の頃捕うる輪と男奥の白鯨とをま
じて鯨居川の沙石小包み瓶やうのりのふうへ入是鯨ゆき
國の海ふ通ぞ山川の清流小包の瓶ふうへ入はれを沙石
のまきけのうつてる如くふきへ此川ふく鯨りそくとも
三年捕る事を国禁わく鯨を生せてもあらずば生せば国益
何をうそく越後ハ妻有上田の二庄をうそきく奥野川の急流をう一奥沼郡
轍上の庄川口驛の端ふりて信濃を流る川と合へて古志郡蒲原郡の

○打切り並ふ

北海新泻の海門かつて大河も阿加川と千曲川と千曲川の名を信濃川も
りの字千曲川の水源ハ信濃越後飛驒の大小の川もあまく流と併て此大
河をうそく越後ハ妻有上田の二庄をうそきく奥野川の急流をう一奥沼郡
轍上の庄川口驛の端ふりて信濃を流る川と合へて古志郡蒲原郡の

中央をうきまく海ふ入る信濃の流ハ濁り越後ハ清一信水ハ犀川の濁水
あるやゑ之鮭初秋より海を出て此流ふ休る蒲原郡の流ハ底深く河廣也多
大網を用ひて鮭を捕るかの川口驛より上上田妻有のわすりとて打切とのふ
事をなして鮭を捕るその仕方ハ夏の末より事をなして岸根より川中へ
丸木の杭を建つて横木をそえて直下透間うく竹簀を立てて牆のおとくふ
ヨリ川の石をトモリて力とろを長まへ百間二百間ふりする周圍形ハ川の便利
ふをす船の通路ハこまを除まく障りをきみを又通船の路印を建て夜の
爲とそきとまくふとのふ物を簀下へあぐ鮭の入るをさうふくちくと頬あ
のをえをも母の作りすへ竹を簀ふあとて末をぶ縛一鮭の入るべき口の方
竹の火を作りうけて腰をす一地ふつく方ハひしめ上ハ丸ノア胸少彭張あり
長さハ五尺ぞうりと鮭入らんとをきバロ廣ぐサラホツラ功ふ作りうるものと
こまをつとめハ筒とりびきを濁り詫もすさん田舎言語又古言のヨリを

りひつまもじをあひふもあきど言の清濁をとりちくと物の名うどのか
きるも多一 阿加川を取まくと此お切を作ふ幾多くの費ある事やゑ漁師
ども語りひあひくある事へ打切ある岸又假小小屋をつくり漁師ども
昼夜こまふありて夜も寐ぞて鮭のかまを待て七月より此業をなすて
て十二月寒明まぐ一連のりのかまく此小屋ふありて鮭をうるぬ打切ハ川口を
一番とく水上へ十五番半をありうらひづくの持とく川ふその境目ありて
もうもよ嚴重○さて鮭ハ川下より流ふ休マ打切ふりう船のりよふべき
所ハ流はお切ふせよとく小滝をうもゆゑ滝ふのびをいとすや大きて打切の
よどみふりうかの垣ふせよとくにせよとくかこをうづねづをう
ふる所ふりうぐりうげんとくてうふ入きが底あるゆゑいぞんとちくふ口ふ尖
りの腮ありて出るすあひぞ○きを小屋ふありりのハからうんともすと
をそりうもうすとくいふ舟をのりび一 大木をニツふりて直を○ 濱の浅き東

雪下る寒夜ゆも錢の為ふとあさまさをもひとぞ赤裸ふりて水ふ飛入り
つをもづ一鯛あまびつのまゝ舟み入とまけをひと走大鯛ハ三尺あまびりを
ありの轟狂ふやゑ奥揆とりすのふく頭を一打うてば立地死たりふ奇
きよへ此奥揆とりすの馬の死をきりくら揆ふあまびり死せぞ私ふつす
うちつちふそへりつ打ても升ぞ又まづ頭ふ打づき取もありと漁夫がりり
鯛ある所ゆくがくゆく此うちをもけぞ助賀さきとて鯛の仲買あらりの世小屋ふ
用ふと馬の死きるつもこどもききうけをうそうる。

○ 撈網

かきあくとへ擣網うり鯛を擣ひ捕るをひそその擣ひ網の作りやうへ又ある木
の枝を曲げあくせく飯櫻うりふ作りとくふ網の筋をつけ長き柄ありてそ
ふくまりとそ岸の阻する所ハ鯛岸き小つまくのびりのゆゑ岸小身を置ち
りの架をくまくとふ居て腰ふ奥揆みづちをき一鯛を撈探りてまくとくらり
くらりやゑうるべ

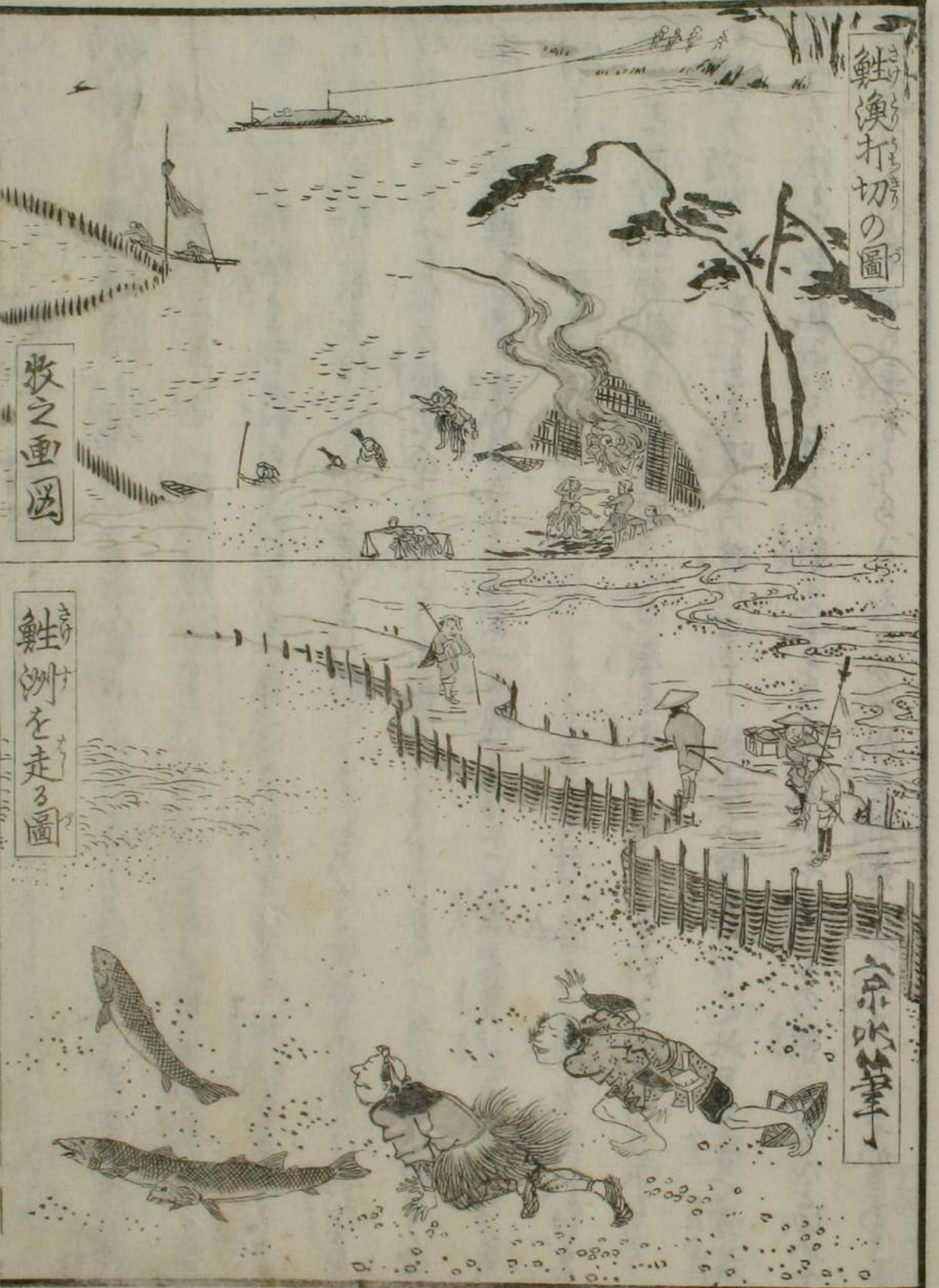
岸の絶壁うき所ハ木の根ふ藤繩とうじやうをくまく架を釣りてふ居て撈網
をもるも稀ふあり幾尋いくひろともうに深淵ふけんの上ふこのよろをつりて身を置一條
の繩なわ小命をつるぎとあくその業をうそそ怖おぞリともあらざるハ此事ふるき
くらりやゑうるべ



鮭漁籍突圖

宗水筆下





○漁夫の觸死

或村ふ不祥の事ゆえ夫婦して女人をすうひ五つと三つふうる男女の子を待
う農人ありけり年毎ふ鮭の時ふりまびそな漁をすて生業の助をもつて此
所はもぐく岸阻ゆゑ村のりのおり岸ふうの架を作りて櫻舟をうそある
ふ絕壁の所ハ架を作るものうけまば鮭もよくあつまゆゑの男こもふ架を
つりもろー一毛らの縄を命の縄として鮭をとりけりまで十月の頃ふり雪
降る日やハ鮭も多く獲易きりのやゑ一日降る雪をも厭せ蓑笠ふ身をかへら
朝より架ふわうてまけとどり畚ふくりとあらる時ハ畚ゆも縄をつけおけた
おのとまづ架を鉤す綱ふ縋りて絶壁を登りまを引わづくつみをせぐ
て登り下りまることふ慣て猿のこと一物喰ふ時ものがむに此日も暮て雪荒
ふきりけまば雪荒ゆへとくを鮭えやまきがや多ふかづの架ふやんといふを
雪荒うまばとて母も妻もとめうるをまづ炬を用意して架ふわうてかまふを

せふをとてまけあまこえりやゑ鶴飼の謡曲ふうふごとく罪も報も否
の世も忘れをもかりうくや時をぞうつゝる○かくてその妻ハ母も即
子ども寐ゆまばの雪あまふ夫ハまことを凍え玉をうち行むとつま飯
らんと蓑ふとの帽子をかうり松明をとくやふ二本を用意して腰ふに
がくふいだう松明をあげまきのぞま遙下ふある夫ふこゑうけしづかまも
ん初夜もりつまをとつんりそやからて饭り玉へ飯りあくまふて酒もひとも置
とつも西かとくの雪荒ゆてよくもまこえで櫛こゑをあげまりバ夫あまこを
きつけようこうべよ鮭ハあまことくとぞあまくうちよりてうまき酒をのむべ
今をとて捕てくもんそらへまきくまとひまうりバ松明ハとふかうんとて燈
する木架をつりとて櫛をくとく樹のまふきーをまくと別の松明不火
をうつして立くらぬとまぞ夫婦グ一世の別をうりける○まるわどふ妻ハ家ふ

養ふるの手をひき、路上に立てらん死ぬるゆも死ぬる身成る
えや一玉、つまと雪ふひき、さくらつるふをぎりつことをあげ
哭ふうなうりかくてもあわせとがくく、焼残りう綱をあすへゆ
ふうのまゆく雪荒ふ吹き、泪もこわすがくりゆく立うすり、
死嚴きえざりと其取ふ近き邊りの友人、此頃の事とくまきのとて物
ぐうせり

○ 總滙

そうちまく
總滻と新潟の湊より四十余里の川上千隈川のやうり割野村ふちうき所
の流ふわり信濃の丹波島より新潟までを流す間小流の滲をうまとへこのも
うりその總滻と川をもまた百間ちうくもあるべく大なり岩石竜の跡
うちまく水中ふあちゅあふかとうする水こもふ激て滲をうまと蟹ふ
ひうて激浪ふのがりうり猶豫や魚漁師ども假ふ柴槁を架みて岸引

ちくき岩の上の雪を切りましてかの撥網をうそままで命の惜み雪
おの／＼己が腰小縄をつけとまを岩の尖りをとひ縛一もく／＼小往來と
みハ岩不足のかくづき舟をさづくふ作り岩ふとりつま／＼登り下りをうそ若
一ゆ／＼を過つ時ハ身を粉ふ碎きて淹れあちりめりその危きよい様方戸
余前年江戸不在一時右の事を先の山東翁ふかく／＼の翁曰世路の灘
ハ總纏よりも危く／＼足りとを又く渡る。まやとく笑て。格言ありと
耳ふとぞすり／＼今偶然ありひびくふとぞやゑあませり

○鯉渙の類術

○當川 三角きりあひ ○追ひ川 水中お机をとえあををむり ○四ツ手網 他国ない下
○金鍵 水中のまけをうぎふろけてと。 ○流ノ網 さきわをともいふあとの長さ三百けんも
○籍突 水中のまけをえまき／＼をとつま／＼のものがはす ○のみやうあま／＼あり
とりへども詳く解んハ駁難けとばその網をりくせり

○鯉の洲走り

まけのすれ／＼と雪前ふ何原をとふわるす／＼かきあまふせあまき人ゆも追
走りう／＼水を飛離ま／＼何原ふのびり網ある所をとま／＼水ふとび入りて
あまを退ま／＼此時ハ大鯉さま／＼をとて水をとま／＼ま／＼よりや／＼小鯉をと
后ふ隨ひくのがり何原をと／＼事四五間ふをとま／＼ま／＼箭のごく／＼して人
の足もかよびぐ／＼さま／＼をと大鯉ひ／＼物ふま／＼して横小網ま／＼時ハあとと
あ／＼ひ／＼す／＼鯉もかよ／＼す／＼ま／＼をとびかま／＼人の捕るを俟／＼ま／＼をとて人
して手も濡さむ三頭のまけをうま／＼ありかき足無／＼て地をと／＼倒ま／＼
あ／＼び起ざるをと奥族中比／＼ま／＼のまき／＼奇奥とひくア

○毎冰

前年牧之江戸ふ旅宿の頃文墨の諸名家ふ謁して書画を乞ひ一時前の
山東庵みハ交情厚くうそをえ／＼訪ひ／＼小京山翁當時ハつま／＼若年々

トトトある時雪の詰ふつて京山翁りて今年正月友人らと接見ふやき
クシモ青柳ふのびりその曉雨すよしもどもふをみけりも青柳を出く
日本堤ふきりくわうふ堤の下ふ柳三株ありうちの柳ふくうりう兩審冰と
きりて一二すづ枝毎ふひとさうりふるが青柳の糸ふ白玉をつゝぬまくす如くよ
きとふ旭のがまくすはともしのまざる好景きりしや奈理の茶店ふあぐりまもく
ひくうなぐりつむくべ詩を作り一事ありきこと餘寒の曉ふ雨のうづくくを
きくん氣運の機工を得てかく奇景をえくすなりと珍りぐりとくまくへり暖地
ゆくめぐりしもあくけきど我國の垂冰ふ比とまく水席の一凧と心ふを
ともかひしもありた○そもそも我國の垂冰をいんふ他ハ始く金くまづ我が
家の氷柱をいん表間口九間の屋根の簷初春の頃の氷柱幾條もく
びさうりふるその長短ハひくうねども長まく六七尺もさうりふる根の太ま
二尺りぐりふひくもするもあり水晶をみて簾子をほくうするやうときと我國

の人ハ雅きより月をみてる事うきびゆくもぞ
右のつら明りふきるやゑ朝毎木鋤こもきもとよ打たたきもとよを又家峯やまねの谷たにふは
りくる所を俚言りきんふごとくとのふごとく春解はるわかもすや絃げんの雪ゆきのあくすりとよらふは
きよやゑつらへ簷いわきよりも大々下おろさきりうき所しょハニ丈じょうもさがり事ことあり次第じだいふ
とりて大ふうも物ものふきぬ所しょハもそもそかきかきをりつゝ打碎うちき時ときハ大カの男おとこ
きどきどもそもそかくふ打たたきをきからててざぎりざぎりる四五尺よんぶしきを童わらわ打たたきて
半邊てあんべの雪ゆき舟ふなふのせせ引きありあり遊まわぶまわりありありててまくらまくら我家わたくしの冰柱こぶりも珍めずら
くも宮寺みやでらのつらへ猶きみち大ひ又山中さんちゆうのつらへ里地さじ不比べレレ

○ 筏掛岩の垂冰

我われが住すむむ鹽澤しおざわの北三里余よ小清冰村こきよひむらととのあり此村持もつの山ふ笈掛くつかけ岩いわといふ在在高さ十丈じゅうじょうありあり横よ二千五面ごんごんありあり下しもふ谷川やかわありあり登のり川かわととのものとの形かたちを風ふをひそめひそめて岩いわの頂てっぺを反ひるがへり伏ふして川かわふ覆おおあわひする下しもハ四五十

人坐して挾みぬかどゆくサ称あひびと一我ダ上越後山名をよぶ奇岩が
石き中ふことをその一つニ此笠掛岩の冰柱とそ我ダ國の人も其をもどり
えゆきそのつらあまと毎日下りてうなづかへ長さ八十文ぞり太さハ二抱
もあり舞うる形状ハ蠟燭のうさぎとすやうのほど里地のつらとすびとく屈
曲種々のうちをうて水晶とエふ作りキテうるどとく玲瓈とて透徹
そが敵の暁よりの小比とせうと此清水村の里正阿部翁のものぞりふ
てきぬ右のつらは我をもどりハめぐりて強く不ふやく人な
此清水村の阿部翁ハむし世ふ聞える阿部左衛門の尉ダ子孫ニ世と清水趙
の関守トシトシふ長尾伊賀守の城跡あり

○滝の冰柱

我ダ上越後ハ山岳つらきまた滝多一滝ある所小夏木の大樹わりそ春ひにう
枝ふつり雪まづとけて葉をひまね木の森をうるさ水滝の水煙枝ふ

潤ひしき津とすり冰柱とすりて玉簾をうけ周へすすうへこまも又
てすゞりのやまとそとの滝ゆもあする氷柱とすり玉簾の内ふ滝
をかくもありくみ四辻ハ亂瑞細玉の雪中へかの玉を出とくの崑山もかくやと
かくらがる奇景也禰師樵夫のやうすう人稀とこまを暖国の人ふゑ
りふれづくとくわくらん牧え拘崎より妻有の庄へ山越をする時日前ふ
そす所

○雪中の寒行者

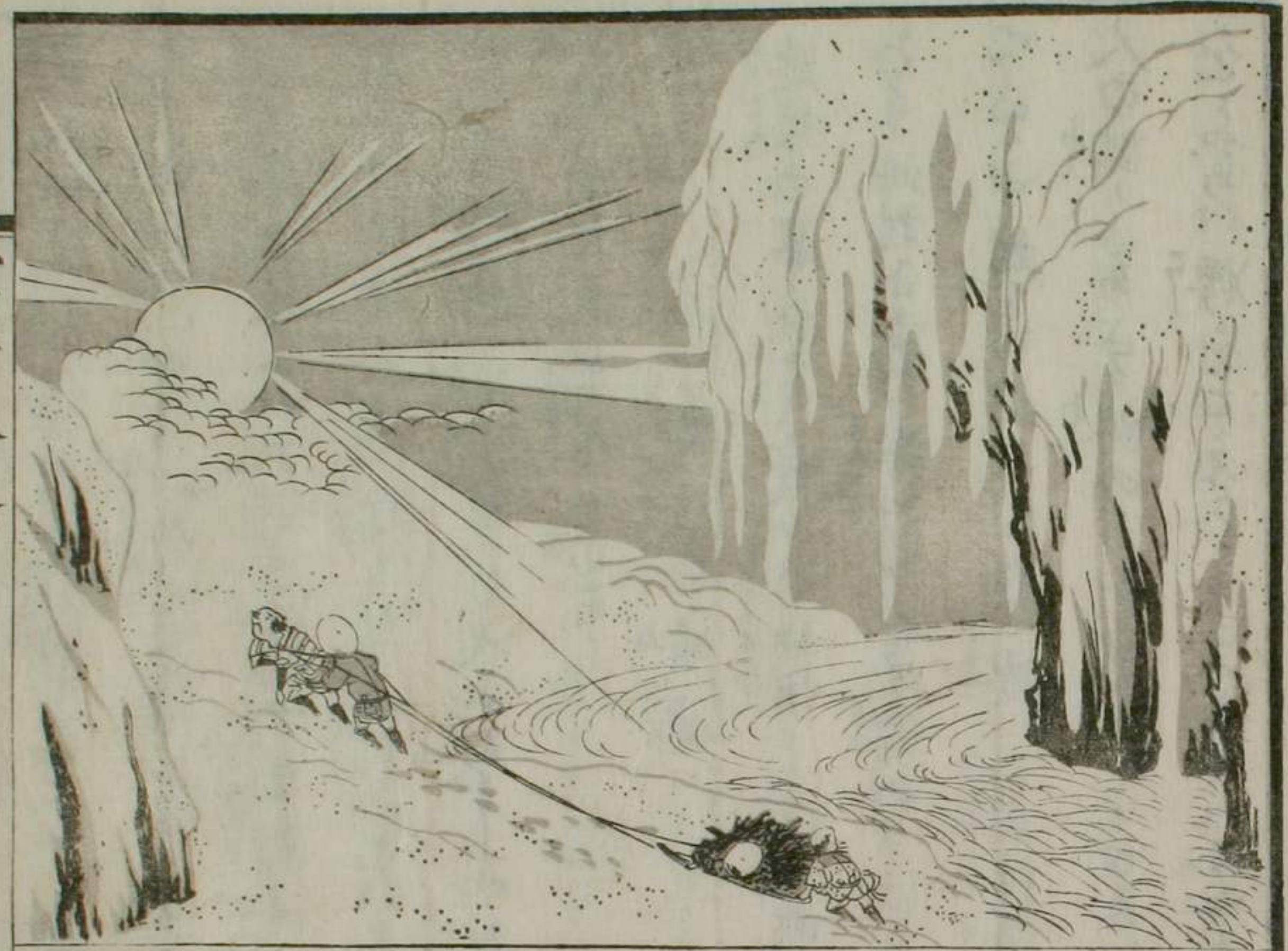
我ダ家江戸ふニとて居る僕ありクミドリ一ふ江戸ふ寒念佛と
て寒行をもる道心者あり寒三十日を限りて毎夜鈴ヶ森千住ふりて刑
死の回向をうそそのもどり股引草鞋ゆくあてうふ着てつともうり又
寒中裸参りとくもあり家作ふからむまでの職人の若人らむくるゑ
そのもどり常より長く作りうち挑灯ふ日參うとの文字をあくあり

うるを持禪ふく鑄をうりうとくもくまくいりへふこうびを死の神
佛（まゆ）とまゆんとまる時ハクルビ水を浴び寒中の夜ハ跋人（わらび）も西東へ
をあらへてまゆり我国の寒行（えんぎやう）事ハことをひそその行ハまゆをど異
く我國の寒中ハ所とて雪（ゆき）をまゆハクル寒氣（えんき）のまづまきやハまくあり（る）
三七日心（こころ）小日（ちよひ）をまゆりまゆのまゆ志（し）を神佛（まゆ）がわくハ農人（のうじん）の若人（わざわざ）ら高
うその雪（ゆき）をまゆり每夜寒念佛又ハ寒大神（まゆ）りとく寒中一七日或（あ）ひ
日ふ三度（さんど）水をあぶ猶（まことに）心（こころ）禁（きん）じて身を拭（ぬぐ）ふ事（こと）をせばねまつるま
みく衣服（きぎめ）を着（き）て坐（すわ）りて、采（う）穂（ほ）の方（ほう）をくへるを扇（おうぎ）ふひま
てごまくふ坐（すわ）を（せまく）せまく坐（すわ）て居（ゐ）て身（み）を此（この）東（ひがし）御（みやこ）
稿（こう）ハ常（じつ）ふをまくとをもくとまくと行（ぎょう）の中（なか）ハ无言（むごん）ゆく一言（いつごん）もひだりとぞ又母（おや）のやう妻（めぐわ）
りとも女の手（て）より物（もの）をとむぞ精進（せいしん）潔濟（けつすい）ハ勿論（むろん）其他（ほか）の人（ひと）もかまふ腰（こし）ふねまく

うそのまくとまく行者（ぎょうしゃ）うる事をあらうせんうまく言語（ごんご）をうけぞんとつまむ
ここまくはり行者（ぎょうしゃ）ふこととづをうけ行者（ぎょうしゃ）あまうてあとづをいぢゆべ行（ふ）
ゆゑをドアトナリ行（ぎょう）をあらわせたゆゑに又无言（むごん）の行（ぎょう）せざるもありまて夜（よ）小（さ）
き（さ）千（せん）垢（ご）離（り）をとり百（ひゃく）度（ど）目（め）小（さ）一遍（いん）でかくらトナリ水（みず）をあびやま十（じゅう）遍（いん）水（みず）を浴（あ）
身（みだり）をのどくぞまゆりのをあくまう雪（ゆき）をまどとも蓑笠（みのささ）をあらひゆく雪（ゆき）荒（あら）
そのかどふひくとて経（きよ）をあらせば同行（どうぎやう）も家（いえ）みゆてかねをうちあいきうと
て出（で）きてる家（いえ）に入（い）るがゆりのへこの行者（ぎょうしゃ）女（め）ふせなあ（バ）身（みだり）のけがまとて川（かわ）に入（い）
又（また）ハ井戸（いのど）をとく水（みず）をあびる事（こと）まくのどくとて身（みだり）をまゆるうり
このゆゑ小行者（ぎょうしゃ）の鉢（はつ）の音（ね）をきけば女（め）ハモ（も）門（もん）ハリぞを道（みち）あ（バ）遠（とお）く
かゆのをまゆてかくまく行（ぎょう）の内（うち）人の死（死）（しび）をまけばとくハ二里（にり）三里（さんり）ある所
みてまつねふち（まつね）人（ひと）ち（ま）ね人（ひと）を諭（ゆ）せぞ志願（しひん）の所（ところ）ふまくごとく飯（めし）をまゆど其

寒行者威德之圖

笠掛岩大冰柱圖



家ふりてりとんじろふ回向えきうをこまくとも行おこなの一つとぞさるやゑふ不幸ふしうありて
日のよきぬりよそへ行者きよしやのきてるをまちくすのとせんをどりふも債たのくして
待まつて寒念佛かんぶつ寒大神かんだいじんまゆりの苦行くぎやうあくまあくま一件いっけんのごとくごとくかまび他國ほかくに
を江戸えどの寒念佛かんぶつ裸はだまゆりふ比ひあまあまばとみとみど異ことかる苦行くぎやうをうもゆゑふ
やその利益りやくの灼然事たくまなことを次つづふあまあま一つ苦行くぎやうして祈いのまびづとの神佛しんぶつも感かん
應おこなむ事ことを童蒙どうもうふ示あらわを

○ 寒行の威徳

近來ちうりめいの事ことうき我わが住塩澤じゆしおざわより十町じゅうまちあまり西南せいなんふあうて田中村たなかむらとす
あり此村このむらふ右うの寒行かんぎやうをもる者ものありけりある日朱儀ひじぎを脊負せふひく五六町ごくご
てす中村なかむらとりくゆくそ道みちハ三国海道みくにかいどうをまび人ひとわ一いちも蟹かに一いちも雪道ゆきみち
人の踏ふみくあく跡あとのミをやまやまくもるやゑいやゑい廣ひろき所ところも道みちハ一條いつじょうゆて其外そと
をあらべ腰こしをこえく雪ゆきふき入いれるこまく多おほく重荷おもを持もすもて武

家いえうりとす一足ひとあし踏退ふみのけてあきのくあきのく道みちを譲ゆるゆ雪国ゆきくにの留とどひとどかの田中たなかの者もの一人ひとり
の武士士官ふやまゆひ重荷おもをくもとああととトと一足ひとあしああととのとと小こ武士士官い声こゑを
あらげあらげ脛きのきととりふ今いまひと足ひとあしをのぐ重荷おもをゑゑとととと雪ゆきふぢぢくらんと
ああくくややえいえいふせんふせんととああくくを無む礼れいのめめと肩かたをつきつきるるや朱儀ひじぎを脊負せふて
りりでよまく雪ゆきの中なかととととふ轉まわりり倒たおきき倒たおききの武士士官も又また人ひとふ殺ころららとと如ごと
倒たおききまだ田中たなかの者もの早く起あきあて后あとも又またももてりてをききけりけりからからああととがふがふト
田中たなかの者ものふ來くわり武士士官の雪ゆき中なかふ倒たおきき起あきあもああががすすを不審ふしん立たよよそそりりふ
ぞ病平びやくへいとりとバ武士士官ふうきうきてああしてからからくまくまよよととの魚色うおいろハハづづるるよよ
福ふくど病人びやくじんともええをぞりぞりとと手てを採とりり引起ひきさんさんともとも手てをののががままを抱いええ
そそんんともともききどどももききぞぞ摺力なせきりののききりりかかそそんんともともききどどもも重おもき事こと大石おおいしの如ごと
ふふて身みを動うごかかてて不思議ふしぎと驚怖おどろきをええくく武士士官志しぐぐの事ことありあり五体ごたい
ももくく動うごく事ことうききとと田中たなかのののの武士士官朱儀ひじぎを脊負せふひひののと

ひふへをきて心ふかやえあまざきと心づきことくらむと行者の罰さんと
行者うるわくまーをうてゆきをよきもかき下ゆきて中村(やくのこかの行
者をこくつまてん玉び玉)こよりへ程ちうすまう玉とてをあきがて行者
をつときてりけみば武士ハ手をもりてゆくとくとくとく行者ハりりとる色
もゆくゆくともりのぞ衣服を脱てかくの水揚ふりけ赤裸ふるそ水を浴て寒
まゆりをの方をふくとくとく武士の手をとて引起けみだらふのくもろくか
きあぐりいふも耻つるきぬを礼をのべて立さりけるとぞ常小我ダ家ふく
田中のきのうかまく

○雪中の幽靈

我(わ)が隣(隣)驛(驛)關(關)の宿(宿)かづまく(花)山(山)と(と)材(材)わ(わ)此(此)村(村)より魚(魚)野(野)川(川)を渡(渡)る
狭(狭)き小(小)雪(雪)のつりくる上(上)を(を)よる(よる)ま(ま)だ渡(渡)り慣(慣)るのを(を)と過(過)て川(川)小(小)ま(ま)入り
き(き)縄(縄)あり流(流)急(急)う(う)ま(ま)だ僅(僅)の出(出)水(水)ゆ(ゆ)も縄(縄)を(を)も(も)候(候)ふ造(作)り(は)う縄(縄)を(を)
ど(ど)川(川)廣(廣)け(け)バ(バ)一(一)も(も)ド(ド)ラ(ラ)か(か)る(る)雪(雪)の頃(頃)へ(へ)所(所)の(の)縄(縄)の雪(雪)を(を)掘(掘)て途(途)を作(作)

じも一夜(夜)の内(内)ふ三(三)尺(尺)も五(五)尺(尺)もつる(る)もあ(あ)ゆ(ゆ)あ(あ)ゆ(ゆ)日(日)毎(毎)ゆ(ゆ)も(も)や(や)く(く)て(て)縄(縄)幅(幅)
狭(狭)き小(小)雪(雪)のつりくる上(上)を(を)よる(よる)ま(ま)だ渡(渡)り慣(慣)るのを(を)と過(過)て川(川)小(小)ま(ま)入り
き(き)縄(縄)あり流(流)急(急)う(う)ま(ま)だ僅(僅)の出(出)水(水)ゆ(ゆ)も縄(縄)を(を)も(も)候(候)ふ造(作)り(は)う縄(縄)を(を)
ど(ど)川(川)廣(廣)け(け)バ(バ)一(一)も(も)ド(ド)ラ(ラ)か(か)る(る)雪(雪)の頃(頃)へ(へ)所(所)の(の)縄(縄)の雪(雪)を(を)掘(掘)て途(途)を作(作)
住(住)む源(源)教(教)と(と)念佛(念佛)の道(道)心(心)坊(坊)ありけり年(年)ハ六十(六十)あまり(あり)と(と)念佛(念佛)ニ昧(昧)
法師(法師)ふくと(と)无(無)学(学)きど(ど)もその行(行)ハ(ハ)碩(碩)僧(僧)ゆ(ゆ)も(も)を(を)少(少)ぞ(ぞ)う僧(僧)きま(ま)だ年(年)
毎(毎)小(小)寒(寒)念佛(念佛)の行(行)を(を)つとめ(め)无(無)言(言)ハせ(せ)ざる(る)や(や)夜(夜)毎(毎)念佛(念佛)して鉢(鉢)打(打)く
りの(の)ふ(ふ)さ(さ)ゆ(ゆ)り(り)も(も)二(二)夜(夜)ふ(ふ)一(一)度(度)ハ(ハ)か(か)の(の)縄(縄)小(小)立(立)く年(年)頃(頃)か(か)き(き)あ(あ)る(る)者(者)の(の)回(回)
向(向)を(を)す(す)も(も)今(今)夜(夜)ハ(ハ)備(備)願(願)と(と)か(か)の(の)縄(縄)ゆ(ゆ)り(り)殊(殊)更(更)ふ(ふ)と(と)て(て)回(回)を(を)
鉢(鉢)うち(うち)て念佛(念佛)一(一)か(か)の(の)縄(縄)小(小)立(立)く月(月)邊(邊)然(然)小(小)臺(臺)り(り)て(て)朦(朦)朧(朧)す(す)り(り)ぶ
う(う)と(と)あ(あ)ひ(ひ)一(一)小(小)水(水)中(中)より(より)青(青)き(き)火(火)内(内)く(く)と(と)えあ(あ)ぐ(ぐ)け(け)ま(ま)だ(だ)亡(亡)者の(者の)陰(陰)火(火)
ら(ら)と(と)目(目)を(を)閉(閉)て(て)か(か)ね(ね)う(う)ま(ま)い(い)あ(あ)ぐ(ぐ)念佛(念佛)して(て)目(目)を(を)ひ(ひ)き(き)一(一)小(小)橋(橋)の(の)上(上)三(三)間(間)を
う(う)隔(隔)く(く)年(年)齡(齡)三十(三十)あまり(あり)と(と)ある(る)女(女)向(向)青(青)ざ(ざ)る(る)真(真)小(小)黒(黒)髮(髮)を(を)も(も)す(す)け

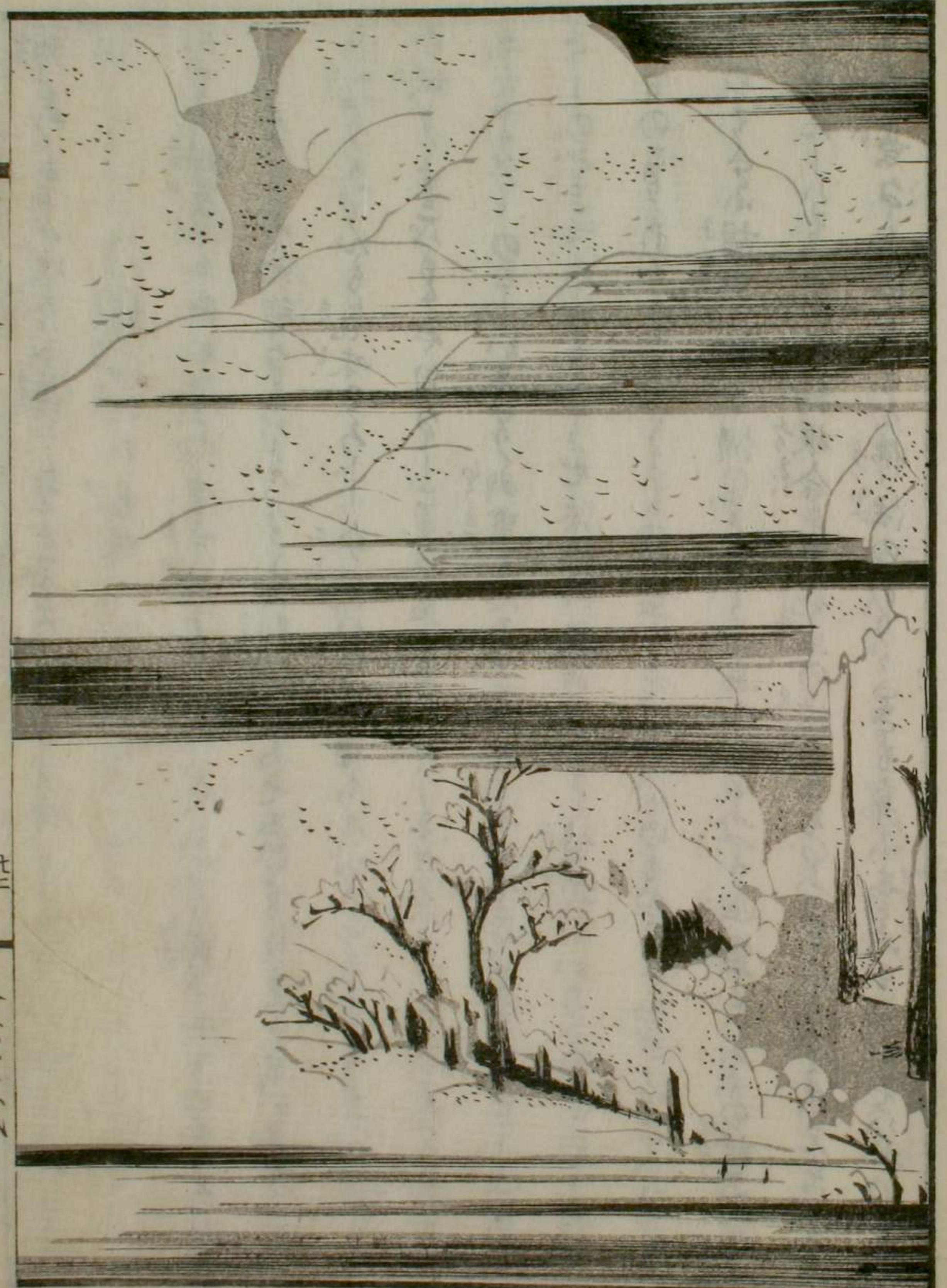
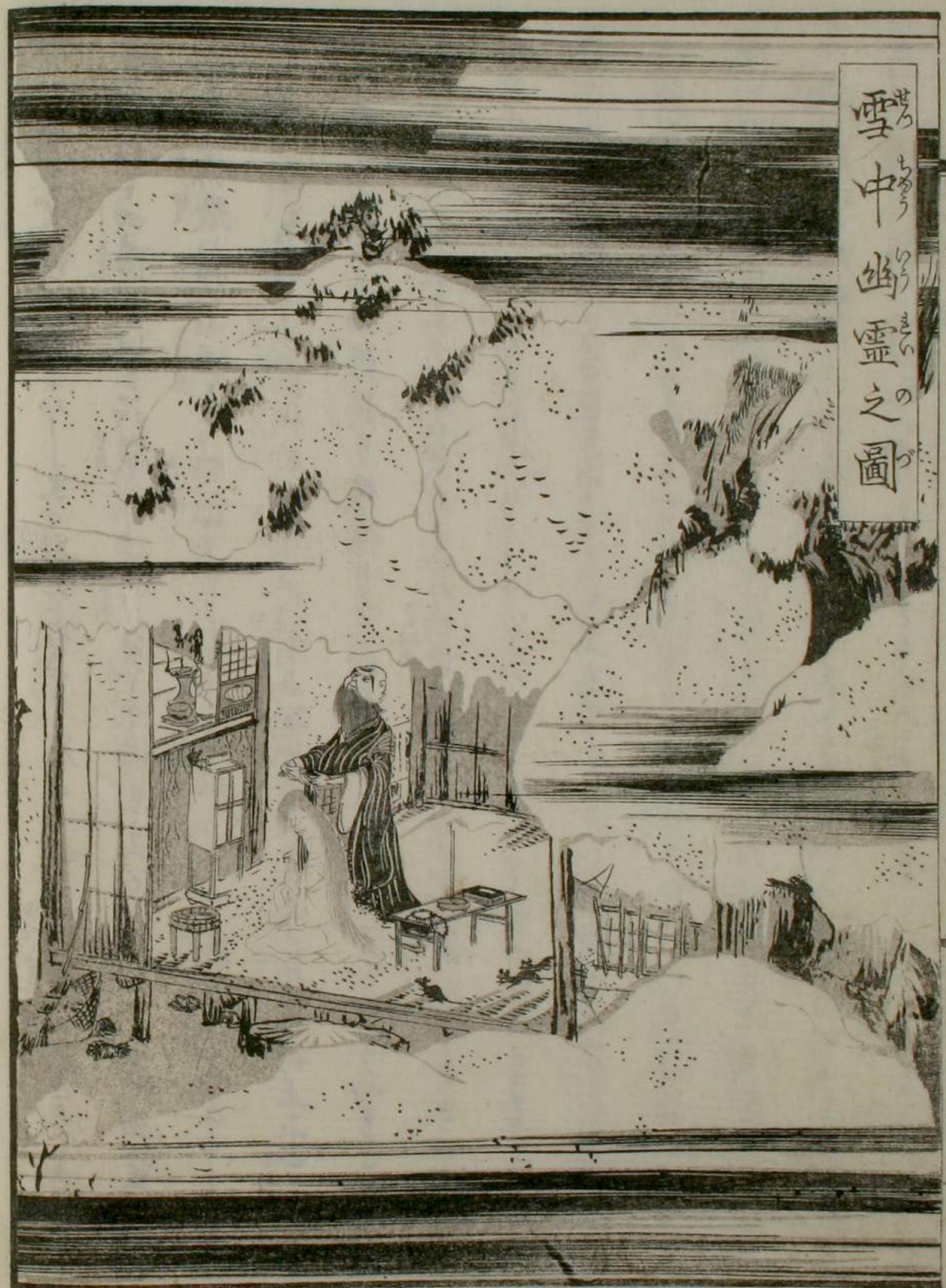
今冰よりひどりとちりかくり濡る袖をきみのそえ立り常人うらぐ呼どひ
て逃げまわるもとその方ふ身を對てつゝへえまふ斯間へうりへふか
りのあらへとえあるもと人うりへと猶よへ不きが体ハ透徹すらふと
あらゆのも幽ふるも腰うり下へありともうともかがろひとこそ幽靈うるむと
まよりふ念佛へけしが移歩ともうくまへふももきて細微うる声へてりへす
こゑく古志郡何村村外の菊とやのの夫も子も冥途ふさきごそ獨り跡小
のうりかとけき烟りまへ立もとまへてよりもじる五十嵐村ふ由縁の者あるやゑ
助けをもんとこの禱をモアリカアキラムと水ふ入り溺死へるゆの今夜ハ四
十九日の待夜みまどせふまでもうまくまくまくまくまくまくまくまくまく
みまくるをむん僧もくらふ小きて回向ありつる功德ふよりてありがれ佛界
をざきとまども頭の黒髪が障りとまきて闇傳ふ迷ふあきまくまくまくまく
めくらうるむを剝て玉にまくある悲哉とて身ふ袖をあらざりぐと

泣けり源教ひよすうそひのとゆをきよとさまでどくふへ荆ささぎ物もゆきま
あもの夜よみよもむ閑山の庵あらわらより望をもてりやまといひけまばまも
うききげふうみづくとえねづく煙りのどく消きえうせ月ハ皎けうくとて雪を照て
○きるやど小源教ひやりふくらす朝日人をよの三さんに來親うぶし同ド村の辯
屋七兵衛やをまゆき昨夜きのよくの事ゆりとち菊きくが幽靈ゆうれいの変かへをこまく小語こご
ち菊きくが亡魂ようこん今夜このよくあくもきよべべかるすハ佛ぶつ小疎こうき人ひとらふもくろきよせま
教化けうかの便びんともあそびくかくくどもどもふそとふけくとくく証人きよしんつけまば人ひと
空言うつこととかくらん和殿わでんハ正直せいじきの聞きえある人ひとときとき幽靈ゆうれいの証人きよしんふよのミヤみやここ
も人の為ためこよひ七兵衛しじょうゑも此法師しふざしといふどくどくごうふてありも念佛ねんぶつの信者しんしゃ
きぶ打うちうきべき御坊ごぼうのよのミミとあそびいりじ固辞いわきやまん火ひととをこらふ來くわ
何方なんぽうふもあき隠かくきかくくとづけやまんさきびよ佛檀ぶつだんの下したとよきかくくきが
ゑきくまく人ひとふくす玉たまかくす玉たまかくす幽靈ゆうれいをえんとく村の若人わかならぐ來くわ

まご心えふとて立飯りぬ

○斯ニテその黄齋ふいづり源教ハ常より心して佛小供養トニテ清らフ
タニ經を誦ヘ居テ七兵衛もやまてぬ誦ヘをひりて七兵衛小物をどくませ
き日もくまけまば佛壇の下の戸棚ふくろをくせ観くべき節孔もありさて
佛のとゞ火も家のもとぎと出ふタニ佛のまへ小新薦をあまて幽靈を居
らむる所トニ入り口の戸をもととくわけおき研にてたる剃刀二つを用意
一今やくと幽靈を待居ト此夜ハあくも雪ふきてモトアケヒキタル
戸口よりもうも風小ありもまてえんともちるやあ戸をキ一炉の木炭小あり
て戸棚の七兵衛ふくろ。蒲團ハあきまきアリセコアリて眠リ五分。いづ
でさることせん幽靈をえんとかりバ心不念佛もとのミシ御坊こそさせをいづてあ林
こぎ玉づらめ叶。音トナリ。あづくあり幽靈をうるともくまく音をよそ玉家。
とひひつ手作とて入ふりひづれ烟草のあくく刻トモヤ吸あまく呻小会

雪中幽靈之圖



拜うまごと次第ふ薄くうるとつをねがきをせり

○関山村の毛塚

かくて井屋七兵衛がとむる内棚よりもひらでまとも怖しきものを見え事ありふ法師のまばとてよほど剃刀をあて玉ひるがふるまがそろへかりき獨りうるも氣味ころへ今夜はこふ宿らん。いづゆもやどり玉(持)一人の破りとまばと用玉へと見え玉(后の証)ふせめやとてこゑをうりの髪の毛をやうへのこへまきて幽靈も心あつてのこへつんとてえをひまび七兵衛もさのをみて手をもととせ法師ハ紙ふつまく佛檀ふきタ闇ふ玉ひ酒ものこりあり者ハうくこもの玉へとてりまうのりのこへとて二人がま炉のちとふ胡坐をまく酒の玉ひ七兵衛がいふやう幽靈といすの詰あへまつるがさへもひて之袖振合をも他生の縁とてとゆふうきいづふえちだえも本意ナ今夜こそ佛法のありざまも身ふきまばあまハ此りわ

坐て百万遍をうへてか菊ヶ佛果のりとまふせん源教とよに功德うん古志郡のか菊ヶ山のをとびけすと入ふたり玉(愚僧)もよどみを証人として幽靈をうへて教化のとおりふせんまがみちもかるふりありと砂石集ふとえすやうど人ふまくうをいぢろげふかがなま一ツ二ツかうきうせうごとて夜もあけまぐ一つの夜具をうへてくびきうらうけり○さてあけの日七兵衛源教を伴ひて家ふ崩り四隣の人をあつらひか菊ヶ幽靈のゆゑをうりけまへ源教懷よりうの髪の毛をとらひてそそをまへ人ひ奇異のおりひをうねきて七兵衛百万遍のゆゑをいひふあつまうり者どもそきこととよき善行あるとひゆうや一玉(茶の子)ハてまきとうりゆうん御坊ハ茶の用意を一玉(茶の子)ハ庵ふうきこまむからいのを借そひらゆうん捕人くをもまたひあつせくやんとひ七兵衛が妻もうかくあひ一夫ふむうひとのゆふ餅をつきまくとまもじくふもトうくんとく儀ふそのゆよ

りをうけり〇かくてその夜源教が草庵ふ人へあつまひてそりあひて
念佛しきみどりくふにぎり一き佛をうけり此事をかことふ傳聞え
話柄とくけりがとうござーあるものいはす源教がむらーかの髪の毛を瘞れ
せんえ、石塔を建て供養せばお菊が幽魂黄泉地のかげゆもよろごひきとひ出
ふかう一心の人あまこありてそのゆきとのひ修ふ石塔を建んともる時ふり
りて源教ゆかうかる度の道師さんハ我がむら所ふわくぞ是最上山閑興
寺の上人を招請あまうーとひ入くさびとそかくとふりて車のよーをつけ
てお菊が戒名をりくらか菊が溺死する檣の傍ふ髪の毛を埋め石塔を建る事
をぐく人を葬るが如くとみあつまひて神んどうふ佛事を營むーふかの辯
屋七兵衛ハ此度より發心して右ふ出家しけりとぞとひとむくまのゆき
閑山の毛塚と今ふ残生り

○雪中鹿を追ふ

他国人越後ハまた大雪の国とがむへらまどき小あゆをま(ふもり)る如く海
濱ふ延き所へ雪深し雪よきハ奥沼頭城古志の三郡或ハ羽田三嶋の二郡
よりて保蒲原ハ大郡ゆき雪薄き所うきども東南ハ奥羽ふ隣りて高嶺つる
るゆき地勢ふよりて雪深き所あり雪深き所へ雪中牛馬を駆ぞりんと
生バ人ハ雪ふ便利のをきの用ふまども牛馬ゆきとをやどとそと事あ
ひぞりー雪中ふてきを進バ首のあくまで雪ふらづまんとまどつゝ事う
ざるがくす十月より歳を越えく四月のをぐままでもあくヤーうひが
のとくと暖國ゆき難儀の一つとまそ獸ひま(ふもじ)るべく初雪をみて
山つるひふ雪浅き國へ立ちあくまども行后まく雪ふらづまもあまびことを狩る
事あり熊のゆ(ゆ)野猪ハ猛きゆき雪うくても得まくらむ鹿羚羊もどく
弱きゆのゆき雪あく得マセー鹿ハてとまく高脛うきゆき雪ふらづまう人より
おとまふ候テア鹿ハ深山をうのまをかくまへ端山ふ居るゆきまく物ふ慣

見ぐとの妙あり。山蠶ふ慣る者ハ雪の足跡をなす。その獣をあり。また
まし今朝のあーあーと。今ゆきーあーとの時をもあ。三國嶺より北
へづく二居の人。うなげある。の鹿をひき。をき。ふり。鹿をひふやんと。
こづひあらせむの。雪を漕ぐ。里で。雪をゆく。を。ど。身を。山刀を
さ。鍊炮手鎗又棒。持て山みへり。の足跡を。づ。林あと。ふ隨。ばり。を。も
鹿を。え。か。人を。そ。逃ん。と。ま。ど。人の。そ。ふ。お。よ。だ。鹿。深田を。ゆく
ごく。終。あ。追ひ。あ。ま。と。こ。も。あ。ハ。剛。勇。の。人。き。ど。角。を。と。う。て。林。ぎ。走
山刀。ゆ。刺殺。も。あ。と。ぞ。と。ま。と。ふ。暖。國。ゆ。か。ま。と。ゆ。き。

○ 沖り山の大猫

我が隣驛。関ふち。き。飯士山ふ続く。東小阿弥院峯と。樵。む。山。わ。り。村。に。持
定。あり。二月。ふい。う。雪。の。降。止。う。頃。農夫ら。此。山。小。樵。せ。ん。と。く。語。ら。い。わ。ら。せ。連。日。の
食。物。を。用。意。一。か。の。山。ふ。入。り。所。を。見。立。て。假。ふ。小。屋。を。作。り。こ。を。寐。所。と。き。

毎日。こ。か。と。の木。を。心。の。ま。ふ。伐。と。う。て。薪。ふ。つ。う。小。屋。の。や。と。う。ふ。あ。ま。と。積
き。心。ふ。足。る。や。ど。ふ。い。と。び。そ。の。ま。ふ。積。か。ま。と。家。小。駆。る。こ。と。を。泊。り。山。と。の。ふ
山。ふ。と。き。り。わ。て。ま。と。夏。秋。ふ。い。と。び。積。か。ま。と。う。薪。も。乾。や。牛。馬。を。駆。ひ。く。薪。を
変。を。あ。そ。や。あ。く。ま。と。薪。を。薪。も。乾。や。牛。馬。を。駆。ひ。く。薪。を
家。不。運。び。と。用。ふ。あ。つ。る。と。雪。あ。き。所。ハ。雪。中。山。ふ。入。り。て。推。す。る。事。あ。ま。る。
や。ゑ。の。所。為。あ。く。我。国。雪。の。為。不。苦。心。も。る。の。一。と。右。ふ。い。ふ。あ。ま。と。ぎ。う。ふ。水。う。谷
川。あ。ま。と。山。よ。り。ハ。數。丈。の。下。を。う。が。翼。う。け。と。び。汲。こ。と。あ。う。ぞ。と。ふ。年。壓。す
藤。蔓。の。大。木。ふ。ま。と。ひ。う。が。谷。川。一。垂。下。り。と。う。あ。り。泊。り。山。一。て。水。汲。り。の。樽。を。薪
ふ。く。一。負。ひ。此。と。う。づ。を。う。す。う。と。て。谷。川。一。ふ。う。水。を。く。ま。と。う。の。口。を。つ。か。て
背。か。ひ。う。う。び。あ。び。づ。ふ。縫。り。て。の。が。雲。機。を。の。ぎ。ま。み。と。ま。り。山。を。ち。う。り。の。こ。
あ。び。づ。う。う。け。と。び。水。を。く。む。と。う。ぞ。と。や。繩。を。用。ふ。と。も。此。藤。の。強。み。と。よ。び。ま。ド
こ。の。や。多。ふ。泊。り。山。ち。う。り。の。ら。此。蔓。を。宝。の。ご。と。く。尊。が。と。ぞ。ひ。う。と。泊。り。山。一
ふ。う。り。の。か。う。一。へ。こ。と。一。二。月。と。多。り。山。一。時。連。の。り。の。七。人。こ。う。と。ふ。あ。り。て

○山言語

右の泊り山もすへ此地ふきぎぞ外あむちる所あり小出嶋ともあらず上越後
山根の在くゆてもももううりもぐく深山ふありて事をうそもあ山とびとある
りてことをつゝ忘コモ里のことびをつゝ時ハララキを山神の崇りありと
りひつゞめ他国ハあくびそんの山言語ヨシトコトヲとミ○采ミを草の實ミ○味噌ミをほゞぐり
○塙タヌケをかくさり○焼飯ヨシメをざくさう○雜水ジツミをぞう○天氣ヨキの好ヨシをしうづら
○風カキをそよ○雨カキも雪カキもそよぐアリ○蓑アリをやち○笠アリをつうり○人の死アリ
まづく又アリへとアリ○男根エビンをまづくアリ○女陰ガマクニを熊アリの穴アリ此餘アリあまくアリさの
まづくとアリもくアリ女陰ガマクニを熊アリの穴アリとアリをすてアリもくアリふこまくアリのことアリとアリ商業アリの
符アリ調アリとアリのあアリかアリドアリくアリがることアリを山アリゆくつゝアリが山アリ神アリの崇アリ
しきとアリ信アリがけアリとアリ神アリの変アリ人アリ慮アリをゆくうアリ——謡アリづアリざアリ

雲空座頭を降走圖



○童の雪遊び

我があすはあをへりるごとくもと十月より翌年三月をままで歲を越す半年ハ雪ニ此うふ生れぬうふ成長するやゑつゝの雪遊びをみる事あらぐありて暖国ゆきまゆタ一その中ふ暖国の人あらがりもよろさるあらびありまづ雪を高く掲揚もまつて上うどを童ども打よりて手あらびの木鋤ゆき平らふうそらうけりよしも雪中みたうをまて雪をあつめて土壠を作るやうふよ和どの圍をつうやくそめ間ひゆも雪ゆて壁めく所をほりこふ入り口をひくに隣の家と一そべの圍ゆも入り口をひくに内ふ宮めく所を作りまふ階をまうけ宮の内ふ神の御体とも見るやうふはくらもえことを天神さまと称一あらびも大ら達きどもまろい物を焚祭に所をも作るもびくまゆ雪ゆく作りよるこ雪をくぢめゆをまくことを雪ン堂又城ともりふ児曹右の雪ン堂の内ふあつまり物をど薫て神ゆもさげませーぐもうく大馬の齡を歴く今ハ夢のやうこり

○雪ふ坐頭を降る

まへゆむりうごとく雪のうち小春をむづゆふ歳越の日ゆどへりづきの家あてもこときふあ雪を掘そ寒のあうりをとりやくする雪も年越の事あげまくあまびきて取除をひくぞ掘揚の屋上ふひとき雪道歩行ふとすりあつき取もありひとせ歳越の夜余が点をあくる俳諧の巻を懐ふ一俳友鬼角子を伴ひその巻の催主のゆとへいて巻を主ふ遣一けまびよろびて今夜ハめでて夜うりゆく語り玉とく主人の妻妻娘も打まむ

てりてあけりまえまめぐの雜談のうふあやのつま狀之ふ歳の
夜ハ鬼の來るとて江戸の厄拂ひとひふすのありて鬼を追ふるをあけろ
りひきて物をひきとまへもあらもくるすあらも鬼の來るといふ空言
もさきつゝみやと聞ふ余とえとへあらも持玉ふ年浪草ふ吾山があま
しハあきせりの書を見玉とひふ兔角子ハ價あも醉しまだ戯言そりふ
やう鬼のくまとりゆりでそとさん女あらどあつまりをす所ハ鬼の好
む所と鬼のくまとばとそとへの豆まきを鬼やうひとへりふうを俳諧の季上
せふもええうとひ母のかうふかう十三ふう娘がゆふねーとの鬼を
えーすありしや。そとくとも鬼ふもさめぐあり青鬼赤鬼ハ常のふと
白の白くてすきを白鬼との黒くて肥太りするを黒鬼とひふがの江戸
小在ー時厄拂^{アキヒ}鬼をうつて西の海^{きみり}と投するをえする事ありそ
れ鬼ハ黒^{アカ}江戸の歲越ふき夜ハ鬼のありくらまばらのとうとう

鬼ハひきすもあらもあらもあらも窓よりのぞきやもんとくわまふおとせば
よもよもじももも空言のうふきと口ふひりど母の左右ふよりつまくわちく
さぬこけりからをりも人々の座りゆる后の方ふくまくあらり窓あり
がまび^ハ音ありてまどをやぢり^ハ掘あげの雪^ハと崩^ハとあらの申ふ人
の降りぐりけと女ハまみ^ハ呼とひてうづて^ハ愕然迷ひ男ハまみ立あ
りそひどうきけり下部^ハもこのかとくまみをよりて崩^ハとあらる雪^ハまみれ
る人を見えば此家^ハも常ふきてる福^一とひふ按摩^ハとの小座頭^ハけり幸ひふ
班^ハもうけざわら^ハ腰^ハをまくると福^一きりとをまみ^ハとばかりのま
まくまく下部^ハあらかちる雪^ハをとりのけ窓^ハをもくりふつらひうどをあらの妻
まみくまくふ福^一鬼角^ハと鬼のもなーあらをまき^ハふ鬼^ハとまひそ
留^ハまくひせりやどまき^ハの夜ふ育^ハ窓^ハをうらごまくひまくひまく
まくとくくらひやくとをまくふあらりけまばあら^ハまきあらりゆひぞ福^一

りとて窓よりおちひづれりや所へまきうどひ福一うちあまつひよ
所へりも今夜のあめどをやさんとてことぞくしてまきのひやつのもとが
や姫わげの道きあとへちびひてあへゆとあへまきとまがあやまちて轉
うる窓をもかゞすておち入るこまくまくあるゆいひどゆ玉と
り姫も娘も口をそろへ鬼ふやとそひまくもひきすり憎き音わと腰立
りあドのつまひづりをやあだまことくの吉方ふあづ窓をさぎ日
のうきゆり入りへくもくしまくとくとくとくとのあひみが
鬼角くらうより福一まづうすく又とよそのうりふよびてあへどりと
福一かくりをとくとくを按むるまくりとがせ鬼角ふむひ哥一首よ
ひくま玉ひまとひ此福一ハとくにうけひと俳諧もざき哥をもよむのあ
まがあづらかくうとえ鬼角がなまつるをよませまきせばそのうま
吉方う福一とよむこちくまぐ入りてあづらむへりやど

らひうすふす人よりでアリとまやうトキナドキナド
孟をめぐらヘけりあすすんつまの羽織を
とて福一をとくせけをバ膝ひざのせまくをでさびりあやまちの高名たかめいあうとてあ
まうけよろこびをアシテ歳と越こふきをすをりせんとて羽はありまくをで
きびりをうちをつアリて猶まらをよろこびをけりを之をが吉瑞よしと成なれん此年此家の娶初産めう
小男子をまうけをまひもをくをかひを三みツのをア庖瘡ぼう瘡さうもからくをして今年と
ツをふきをぬ福一ハづる伶俐れいれいのをアシテを今江戸をあをて宦えんゆをもとをうと聞

画翁
少年京水百鶴
南宮子
季子子

少年宮

西園
子山

北越雪譜初編卷之下終全三卷大尾

文溪堂近刻書目

北越雪譜後編 三卷

越後 鈴木牧之編撰
江戸 京山人百樹齋定

京水百鶴画圖

右前編ふりてる雪中神社の祭事 佛閣の法會 民間の行事
大小雪車の制作用状雪中種々の奇談珍説を記し 雪の消終る
手本を圖ふやへ 北越の雪中を目前ふ視るが如き書也

骨董集二編

上帙二卷 下帙二卷

醒齋京傳先生遺稿
京山人百樹翁補訂

右舊板曾て本舗ふ購り得方ゆゑ京山翁ふ乞ふて醒齋先生
の遺稿を索り翁正ふ補訂を下りて今代上梓も

女粧考 五卷

京山人百樹編

上古より近古までの女の風俗の古圖をのせ 古書を引く其風俗の
沿革を考へ 鏡拂をもとめ 女の容飾の道具をうび 小葵脂
白粉の始原眉を拂ふ 変銭漿をつけ事のる其譯 講をど
まべく女の風俗小係りす 事をりとぞ記せり

和漢印章考 五卷 同編

本朝古印の摸本を圖り 其制度の用格を弁べ其考へ 漢印ふ
湖を以て和漢と目をす 朱象賢が印典の作格小倣ひて記り

食物沿革考

同編

昔の食物と今の食物と寔格在る事を弁べ 食器の古圖を
のせ考を記せり

芭蕉翁年譜

一名むせ翁年代記
翁一代の始終を記せり

同編

高尾考

妓女高尾十代の傳を記す
遺墨をうべのせり

同編

茶湯初心抄

茶道を学ぶる人此書をとよま
茶席ふうりすす恥をとよま

同編

俳諧早引草

著作堂主人著

四季の詞ふきありもく 俳諧ふ用ひきりのへりよま
註釋へ見ふ見すく引ふ速うを宗とく席上の重宝
あまふすほりのね

東都著作堂主人著

出來

玄同放言

第一集三冊
第二集三冊

天地之部 植物之部 人事之部 亦人事之下より
墨用之部 小至この篇ハをもく珍説奇談を雜
識一且縮字を多く載せり 閱するにふあらう
あむあまを上集ふ比と俗の耳ちらにすら多う

同 第三集三冊

同 第四集三冊

天保七丙申年九月發兌

此集全部十二卷小至りて始めて全うへ遠く

物種々載す

近刻

書肆

島田
藏書

河内屋茂兵衛

大坂心齋稿筋轉勞町

江戸小傳馬町三丁目東側

丁子屋平兵衛壽梓

